

# 松戸市のために真剣勝負



## 山中けいじ

1979年5月28日生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業後、サラリーマンを経て、第26期生として松下政経塾入塾、地方自治を学ぶ。2006年、松戸市議会議員選挙に当選。現在2期目。

### 学生時代にシヨックを受けた議会の有様

—— ホームページ上で、これまでの議員としての取り組みを「私の通信簿」として自己評価していますね。

**山中** 通信簿は私のやりたいことの一つの柱です。議員は、やると言ったことが言いつばなしになる無責任な人ではないけないと、学生の頃から感じていました。自分が議員になったらこうしようというイメージは当時から持っていて、点数にするのは難しいので「実現できた」「一定の改善があった」「行動したが結果がでなかった」「行動しなかった」で◎から×の4段階で評価しています。

特に注目してもらいたいのは、○や△といった完全に結果が出ていないものです。実現できない理由はいくつもあり、私個人の力ではどうにもならないことがあります。実はそれが何なのかという点に着眼して欲しいのです。

例えば私は議員定数6名削減を訴えましたが、実際は2名削減で留まりました。議会から圧倒的な反発があったためです。「私の通信簿」を見た人が、そんな「定数削減に反対する議員と賛成する議員がいる」と気付き、投票の際の判断材料にして下さればこの上ない本望です。具体的に取り組みを発信すること「私はここまでやりましたが、実

現できなかった原因は、私か議会か行政か、あるいは市民の皆さんかも知れませんが、どう思いますか？」ということを考える起爆剤になれば良いと思っています。

—— 政治に興味を持つたきっかけは何だったのでしょうか？

**山中** 高校生の頃、駅前でビラを配っている政治家に「何をしているんですか？」と直接話しかけてみたのです。そこで初めて市議会議員という存在を知りました。

その頃から自分の中で「松戸市を良くしたい」という思いもあったので、興味があった議会に傍聴に行きましたが、そこで大きなシヨックを受けました。



日本を創る ⑪

居眠り議員はいる、私語や野次も多い、質問しない議員も多い。「なんだらう、ここは」と思いました。その瞬間「これなら自分がやったほうが良い」と直感しました。

## インターネット中継に賛成したのはたった2人

—今は議会をインターネット中継して、一般市民に公開する自治体が増えています。松戸市の対応について教えて下さい。

**山中** その件に関しては、個人的に大きく寄与できた部分だと思いません。松戸市は議会生中継の対応が遅く、周囲の自治体はほとんど取り入れているのに、松戸市だけ遅れている感があり、市民から取り入れて欲しいという陳情が来たのです。

当初、その案に賛成したのは私と本郷谷議員（今の市長）の2人だけでした。つまり生中継して欲しくない議員が大半だったわけですね。できないなら合理的な理由を下さいと言っても、あるわけがありません。国会だって生中継しているのに、自

治体ができないはずはないですから。議会が発信しないなら自分でやるうと思いい、自分のブログに議会で起きたことをありのままに書きました。あまり人のことを書くといろいろとやう人がいるので、自分が言ったことや行動（＝事実）なら文句なからうと。

議会生中継以前も録画中継はしていました。しかし録画では、議会にとつて都合の悪いことは編集されて放送されず。何が編集されたのか、市民は知る権利があると思います。国会でも各種メディアでも、今や世の中はそうなっていますから。でも、なかなかそこまで捨て身で主張する議員はいないのが現実です（笑）。

こう言つてはなんです、公私ともに無所属、の私はフットワークも軽く、正しいと思えば自分を貫きやすいのです。議会には一人くらいそういう議員がいらないといけません。

—冬でもコートを着ずに街頭演説を行なっているようですが、有権者に少しでも何かを伝えたいという思いが伝わってきますね。

**山中** あえて書くほどのことはないです。でも、私にとつての演説は真剣勝負の本番なのです。人を救おうとする議員は、市民以上に苦労しないといけないと思っています。「結局、議員つて裏で遊んで美味いもの食べてるんでしょ」という偏見が私自身大嫌いで、それを打破しようと始めたところもありますけれど（笑）。

だからつてそんなことしなくても……と思われる人は、一度実際にやってみて下さい。いろいろなことが分かりますよ。

市議は仕事現場が生活現場なので、変なことをしたら怒られるし、頑張ったら「よくやってくれたね」と言ってもらえる環境は、凄く幸せだと感じています。

ちよつとカッコつけて言うと「自分が議員をしなくても大丈夫だ」と思える松戸市になるまでは、政治に関わっていたい。「松戸が一番良くなれる」と思うポジションに身を置きたいと常に考えています。

（取材・文 稲生永明）

# 明日を創る

